

特集

上司が薦める“わが一冊”

読書から得るものは？

グループ各社のトップのお薦めの本は？ その理由は？



【今号のトピックス】

社長インタビュー：三愛 和田敬三社長
夏です！

「三愛水着楽園」の季節です！

東日本大震災

リコー三愛グループ関連の
被災状況と災害支援対策

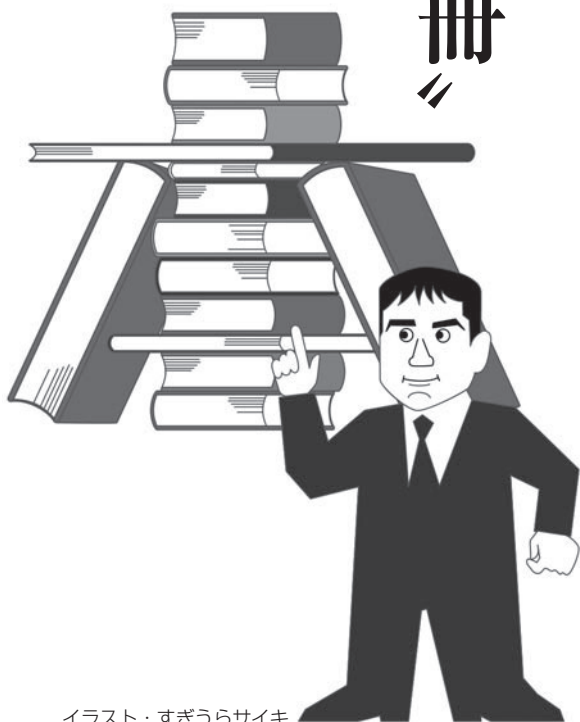
わが社・わが街

株式会社 ニシムラ

佐賀県吉野ヶ里町

上司が薦めるゝわが一冊ゝ

あなたはどんな本を読んでいますか？
 あなたはどんな本に感動しましたか？
 あなたはどんな本から何を学びましたか？
 今回の特集のテーマは「読書」です。
 パート1では、カリスマ編集者・川辺秀美氏が、特に若い人たちに
 向けて、読書の意義ゝについて語ります。
 パート2では、リコー三愛グループ常任理事会社のトップが薦める
 ゝわが一冊ゝを紹介します。
 そしてパート3は、グループ社員の皆さんが選んだゝわが一冊ゝです。
 さあ、きょう、あなたはどんな本を手に取りますか？



イラスト・すぎうらサイキ

Part 1

今こそ問われる、読書の意義。

川辺秀美

株式会社スカイライター 代表取締役

「良書はあなたに読まれることを待っている。」ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』

読むこと、書くことが、
 今ほど問われている時代はない

ポチッ。パソコンの電源を入れる。

これが、わたしたちの仕事のスタートです。まずはメールをチェック。朝の日課です。このことは、あらゆる職業に共通したルーティン

ワークとなっています。そして、毎日大量のメールと情報ソースを「読む」ことが仕事の大半を占め、それに対してメールを「書く」ことに追われています。

気がついてみると、一日中メールの処理をし、パソコンに座りながらデスクワークをするだけの日々が続いたりします。

さて、パソコン漬けのわたしたちの日常の中に、今度はソーシャル・ネットワークが出現してきました。ツイッターやフェイスブック

といった新たなコミュニケーション媒体が、さらに情報という津波となって襲いかかってきています。この現象にどう対応していったらいいのか、戸惑っている方はいらつしやるでしょう。

今、人類は新しいコミュニケーションの時代の波へと向かっていきます。

では、今までとは何が劇的に変わったと思いますか？

それは、かつてないほど「読む」「書く」という基礎能力が仕事で問われているということです。

ひと昔前までは寡占化されたマスメディアが情報を集約していました。そして、多くの人々が似たような情報を共有していました。しかし現在、情報は巷に溢れています。その真贋を見抜く目を養わなければならなくなりました。それによって*アルファ・プログラマーのような目利きが力をもつ時代となったのです。ただし、その目利きばかりに頼っているわけにもいきません。

そこで「読む」という基本的な能力がわたしたちにとって必須となってきました。しかし、ウェブや新聞、雑誌の情報をいくらかき集めても「読む」という力は上がらないのです。そして、「読む」ことは「書く」と対になる技術です。よく「読む」ことができれば、よく「書く」ことができます。そして、この「書く」ことも、パソコンでひたすら文字を打ついても一向に能力は上がらないのです。

では、一体「読む」「書く」能力はどのようにしたら上がるのでしょうか？

(*アルファ・プログラマー多くの読者に読まれる、影響力のあるプログラマーのこと)

読んだり、書いたりすることは コミュニケーションの技術である

これだけ大量に情報を読み、大量にパソコンで文章を書いているにもかかわらず、わたしたちの「読む」「書く」能力の技術は、年々低下

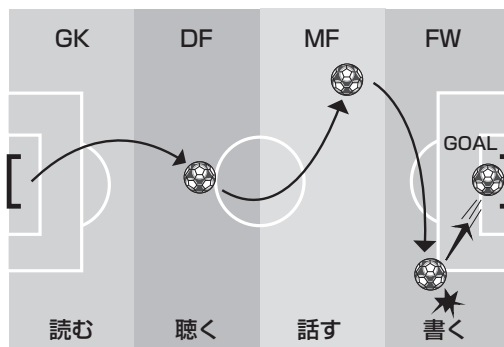
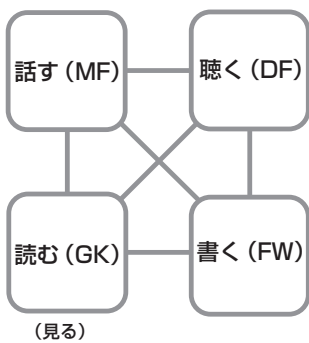
傾向にあります。それは、わたしが書籍編集者として活動し始めた九十年代と今を比べても歴然とした差があります。作家も編集者も読者も甚だしいレベルダウンをしているのです。正直言って、現在市販されている本の大半は大幅なりライティングの産物か、編集技術によってかなり加工されたものだと考えてよいでしょう。

教育の根本は「読み」「書き」「そろばん」ですが、「そろばん」ができる人は増えましたが、「読み」「書き」は義務教育から大学教育に至るまで、うまくその技術がビルトインしていません。ですから、社会人になったら、「読む」「書く」を鍛え直す必要があるのです。

それではどのように「読む」「書く」技術を向上していけばいいのか？ と言いますと、コミュニケーションという大きな枠組みで考えていくことが重要なのです。つまり、単体の技術として獲得していきこうとするのではなく、それぞれを組み合わせて仕事の中で鍛えていくということが必要なのです。

図を見てください。「読む」「書く」「話す」「聴く」というものが連関してボールをつなげていくというイメージをもっていたかどうかよよいと思います。その中でも「読む」はGKのように情報を最初にキャッチする要です。そして、「書

コミュニケーションの4つの連関とサッカーのポジション、パスの流れ



く」はFWのようにシュートを打つ役割です。つまり、企画書にまとめたり、契約書を交わすということをしますよね。

では、これらの技術をどう組み合わせる具体的に実践していくのかという例として、一つだけ取り上げてみましょう。

あなたも立派なコピーライター

次の英語を翻訳しなさい。

Don't think, feel.

じつに簡単な英語です。あなたならどのように訳しますか？ こんな簡単な問題を出してバカにしてんのか？ と思ったあなたは勘違いしています。これだけでもあなたの日本語センスはかなり問われます。

① 考えるな、感じる。

このような翻訳をしたあなたは、あまりセンスがありません。なぜなら、誰もが思いつくレベルですから。

② 考えるんじゃない、感じるんだ！

こう訳した人はなかなかの日本語センスです。ポイントとしてはまず口語をもってきたところ。そして、「ー」をつけたところ。読む技術、書く技術ともかなりの水準です。

③ 頭デッカチは× 心で感じるは○

もはや超訳のレベルですね。あなたのセンスは作家並みです。これくらい自由に一つの文章を解釈し、原文の意味を外していないあなたは言うことなしです。

以上のように、簡単な英語（日本語でもよい）などをつかって、いかに言い換えて「わかりやすく面白く」伝えるか？ というトレーニ

ングを仕事の中で取り入れてみてください。これは「読む」「書く」の連関の中でアウトプットの技術を鍛えるひとつの例です。

英語が問題なんじゃない、 日本文化が問題なんだ

いまグローバル企業において英語公用語という問題が盛んに議論されています。ダイバーシティに直面する現場においては近々のテーマでしょう。しかし、ほとんどの企業は現在も未来においても日本語が中心です。そして、グローバル化時代だからこそ、日本語教育が問題なのだと思います。

先ほどは簡単な英語を日本語に翻訳していただきました。ここで鋭い読者の方は気づいたのではないのでしょうか？

『わたしって、日本語の語彙が足りないなあ』

そのように感じられた方は大変優秀です。今、わたしたちにとって大きな問題は語彙がないということなのです。

では、なぜ語彙が足りないのでしょうか？ その答えは単純です。読書をしていないからです。語彙力というのは、ある「まとまり」でしか身につかないのです。これは英語学習を真剣にやっている方であれば納得できることでしょう。

ウェブや雑誌やテレビなどから情報を得ても、いまいちその知識や語彙が増えないのは、「まとまりがない」からなのです。

現在のところ、本でしか意味のあるまとまりは得られないでしょう。このことは社会人が読書をすることの「最大の意義」なのです。

また、海外でわたしたちがコミュニケーションをする際も、日本語の問題はつきまとうてくるのです。外国人に日本の素晴らしさを伝えるとしたらどうでしょうか？

あなたは、日本語、ひいては日本文化の何を伝えられるでしょうか。

翻ってみると、わたしたちは日本について何も知らないという事実がぶちあたります。

わたしが誇れる日本のよさを多くの人々に伝えたい！もし、そのような問題意識をもっていたら、いまずぐ読書をはじめてください。

読んだり、書いたりすることで、 見えてくる世界

「読む」「書く」技術が大切なことはこれみなさんにも伝わったと思います。それでは、「読む」「書く」技術が上がったら、何が獲得できるのでしょうか。いくつか列挙してみましよう。

◇流行に流されないスタンスをもてる

あなたが良書と出会うことができれば、流行とは関係のない本質的な情報をつかんでいることと思えます。もし、あなたの読書レベルが

そこまで上がっていたとしたら、あなたはもう情報に惑わされることなく、あなた自身のスタンスを貫いた情報発信もしていることでしょう。これは、めまぐるしく変わっていく情報を取捨選択する能力を持っているということです。

◇企画・開発力が上がる

仕事で成果を上げるためには情報収集が一番肝心です。しかし、この最初の段階、つまり「読む」ことが間違っているケースは多々あるのです。「読む」ということはとても深い技術です。情報をキャッチする段階でコケていければ、すべての歯車が狂ってしまいます。「読む」ことでミスをする、せっかくなまく書いていても、その企画・設計は無駄骨です。その反対に正確に読めていければ、企画の精度はグッとあがります。

◇リーダーシップ力が発揮される

リーダーがしくじるときは、必ず失言や妄言からきます。例えば、



川辺秀美（かわべ・ひでみ）氏

株式会社スカイライター代表取締役

1968年横浜市生まれ。立教大学文学部ドイツ文学科卒業。高野山大学大学院修士課程精密教学専攻。

就職情報会社を経て、出版社へ転職。オーエス出版、インデックス・コミュニケーションズ書籍編集長を経て独立。13年間書籍編集に従事するなかでビジネス書から音楽書、科学書、写真集など幅広いジャンルを手がけ、10万部を超える異色の作品を数々送り出した。現在は「編集」というコンセプトを社会に還元するために、人材教育・執筆・出版エージェントを中心に活動している。仏教と国語力の復興こそが教育の根本と考えている。

主な著作に『22歳からの国語力』（講談社現代新書）、『人を動かす文章術』（PHPビジネス新書）、『空海 人生の言葉』（デイスカヴァー・トゥエンティワン）などがある。

その他、朝日カルチャーセンター『ゼロから学ぶ文章教室』、フェリス女学院大学就活講座など、多方面で活躍している。

info@skywriter.co.jp

社内に発令する一言のメッセージに社員たちは一喜一憂します。また、気の利いた一言や文章によって多くの人々が勇気づけられ、やる気になります。その根本は文章にあります。誰かがまとめたものではなく、リーダーが自らの言葉で情報発信できるというのは強みになります。古い話になりますが、中国が唐だった時代、官吏は文章技術が必須の能力でした。これは日本も同じ歴史を有しているのです。

**本は読むものではなく、使うものである。
そして、行動へ**

最後に効果的な読書のしかたについて述べてみます。読書をするときは必ずペンをもってください。そして、直観的に「よい」と思ったところに線を引いてください。

また、仕事の合間や休日にその線を引いた箇所をノートに書き写してみてください。この読書方法は実用書でも小説でも行ってほしいものです。

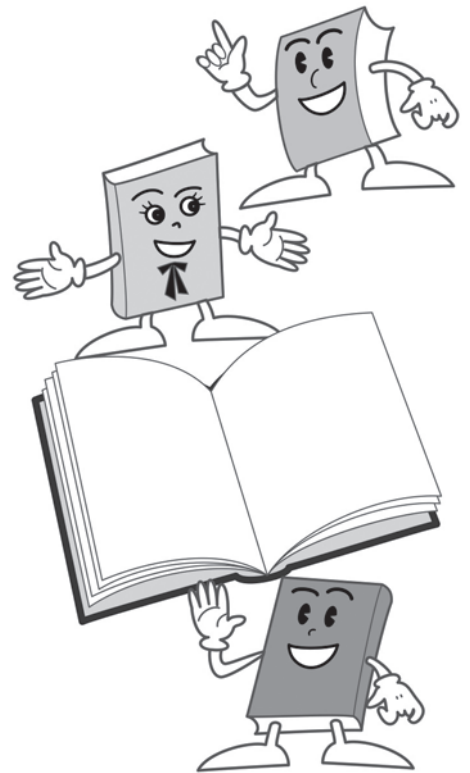
読書をあなたの日常に取り込むためには、本は使うものだ、という意識を持ってください。ぐしゃぐしゃになるまで使ってほしいのです。たとえ小説であっても、そのようにしてください。

「行動を伴わない読書は必要ない」

この言葉は幕末を駆け抜けた河井継之助の言葉ですが、私もそう思います。

読書というものが高級な芸術趣味であっては意味がありません。もっとわたしたちの生活と密着する必要があります。ですから、買ってきた本はすべてあなた自身の血と骨にしてほしいのです。

わたしは二十代のころに読書ノートというものをつけていました。読書ノートといっても他人に見せられるような整理されたものではなく、らくがき帳に近いものでした。



そこには、読書から得た言葉を書き写したり、余白に自分の文章を書き殴った、支離滅裂な文のかけらが転がっていました。

何かを表現したいと思っていました。表現するテーマがとくになかったため、好きなように書いただけのノート。

しかし、今から考えると、その読書ノートがすべての仕事の原点となっていました。愚直にノートを書き続けていくうちに、わたしはいつの日か文章を書くことができるようになり、読書をするレベルも着実に上がっていました。

読書ノートはアイデアの宝庫でした。乱雑だからこそ、そこに価値ある情報が宿ることがあります。もしかするとそれは、乱雑に見えるだけで、情報がまとまっていたのかもしれない。

現在は、一人ひとりが情報を編み発信していく時代です。そのことを意識して行えば、他人より一歩抜き出することは可能です。しかも、いまは非常に単純な行為だけで差がつくのです。

それが読書であることは、みなさんも既におわかりですよ！